

ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって —若者問題に関する韓日間比較調査から— 第2報： Yooja Salon の実践を通して—

山本 耕平*

第1報では、韓国の青少年研究者をはじめ、青少年支援施設等で働く支援者や若者へのインタビュー、さらには青少年政策や実践調査を実施し、韓国の若者達の生きづらさについて検討を加えた。本稿（第2報）の目的は、韓国ソウルで展開されているニート・ひきこもりの支援を目的とする社会的企業 Yooja Salon の実践分析を通し、若者が自己の課題と対峙し移行期の発達課題と向き合う時に求められる実践の哲学や若者ソーシャルワークの課題を検討するものである。Yooja Salon を実践分析の対象とした理由は二点ある。第一に、韓国の民間支援団体でニート・ひきこもりを支援対象としている組織が Yooja Salon 以外に存在しないからである。第二に、その母体である HAJA Center の実践哲学が競争社会を批判するかのようなものであったが、新たな生き方を求める実践の成果が韓国政府のみならず我が国の若者実践者達や我が国政府から評価を受けていると考えられた為である。Yooja Salon で若者達と関わり、さらに Yooja Salon のスタッフと韓日で共同研究会を開き、HAJA Center のメンバーと異なる困難を持つ Yooja Salon のメンバーが、社会的自立に取り組む傍には韓国社会での生きづらさを体験したスタッフが実践者として活動している。Yooja Salon に参加する若者達がスタッフと共に自己の課題から解放され市民として育つ力を獲得する過程は、まさにリカバリー過程である。今、Yooja Salon の実践を検討するなかで、韓日両国で求められる普遍的な若者ソーシャルワークの理念や目的を明らかにすることが可能となる。

キーワード：若者支援、韓日比較、ひきこもり、ニート、リカバリー、若者のソーシャルワーク

はじめに

韓日の若者比較研究の代表的なものには、若者を対象とする社会学研究として船橋晴俊らの「公共圏の創成と規範理論の探究」（基盤研究A 2007-2010）が、臨床研究では、間宮正幸らの

「若者自立支援の課題と特別な教育的ニーズに関する総合的研究」（基盤研究B 2008-2010）がある。

前者の研究は、その目的を、日本、韓国、台湾という3つの社会を対象とし、それぞれの社会の若者層が置かれている社会経済的状况を解明し、近年の高等教育拡大が新規卒者の労働市場参入に及ぼす影響とその変化/非変化のメカニズムを検討することにおいている。後者の

*立命館大学産業社会学部教授

研究では、韓国の現状と文化的独自性に即して創意工夫がなされている支援につき検討することを目的としている。

1. 本調査研究の目的と方法

筆者は、韓国調査の目的を以下の点に求めてきた。第一が、韓国の実践者たちが展開する若者実践を分析することにより、若者がその国の社会や文化との関わりで持つリスクと対峙する姿を見出し、若者達が自己の発達課題に立ち向かう力を獲得する過程を我が国と比較検討することである。

第二が、韓日のひきこもる若者の言葉（語り）を通して韓日両国に共通する若者の生きづらさと個別韓国の生きづらさを明らかにすることである。

2005年韓日国際シンポジウムにおいてインターネット等の擬似社会への参加を行っている若者が増加している事実が報告された（황순길, 권해수, 장미경, 2005）。それは、仲間と出会い、そこで仲間との間に生じる葛藤を経験する直接的な人間関係網に参加する力を喪いつつある我が国のひきこもる若者達と共通する姿が韓国で生じていることが推察できるものであった。

韓日の研究者達は、他者と関わる力が弱いが故に排除される若者達の存在を認めるが、韓国ではひきこもりが、まだ表面化しておらず、韓国における深刻な青少年の課題は家出であるとの見解を持つ¹⁾。ただ、我々がYooja Salonで出会った若者達の多くが、同年代の仲間との間に生じる葛藤を経験する直接的な人間関係網に参加する力を喪うなかでYooja Salonに参加していた。

第三が、Yooja Salonを通して韓国の若者支援を分析することである。なお、本稿では、実践分析の基軸に横井敏郎の実践整理の視座をおく。横井は、NPOによる若者実践分析を行い、ワークフェアとは異なる実践の方向性があることを明らかにした。それは、①就労に限定されたものではなく、異なる他者との関係においてその存在を肯定しうる自己を構築することが基本にあること②個別化されるのではなく、何らかの自助的な共同関係が求められること③地域から切断されるのではなく、地域のコミュニティな関係とネットワークのなかで若者の自立がサポートできること④就労についていえば中間的な労働の場、職場が必要であること⑤既存の市場および労働市場自体に限界があり、それを超えるような社会的企業の創出が求められること（横井敏郎, 2006）の5点である。

筆者は、若者ソーシャルワークの実践課題の設定は、「当事者の個人的病理に焦点をあてるのではなく、当事者が生活や発達の課題さらに障害と向き合いながら獲得しつつある可能性に着眼するなかでこそ設定が可能となる」（山本耕平, 2009）とし、ひきこもり支援の目的を次のように提起している。

ひきこもり支援の最終地点は、育ちの保障にあり、社会への適応を図ることにはない。ここで言う「育ちの保障」とは、現代社会の諸矛盾のなかで育つ若者たちが、その社会をより暮らしやすい社会に変革する主体として育つことを意味する。

本稿では、横井の実践分析の視点と、筆者の考える若者ソーシャルワークの地点からYooja Salonの実践を分析する。

2. HAJA Center で支援者は何を考えてきたのか

HAJA Center 設立の歴史的背景に関しては、第1報において報告し、次のように述べている（山本、2011）。

HAJA は、二つの実践哲学を持つ。一つは HAJA は、実践体を“仕事、遊び、自律の青少年文化作業場”と規定し、“学校が身体に合わない10代たちが新しい時代の学校をつくりだす”ことにより成立すると考える。しかも、注入式教育と競争主義では、誰もが落伍者となり、HAJA は、自主的かつ主体的な協力学習を展開する場であると考える。二つに、HAJA は、その場を“友情と欲待の創意的自律空間”であるという哲学を持つ。ここでの学びを通して彼らは、“選択の道でよりよい判断をする—ともに見守る子どもたちがいる—”“不安だけど、寂しくなんかない”“お互いを励ましあい緊張しあう文化がある”と、集団が互いを疎外しない集団となり育ちあうことを保障する集団となることを追及している。

HAJA Center は、韓国における競争主義が生みだした弊害と実践的に対峙し、人として生きる誇りを追求できる若者を育てることを目指してきた。そこにみるのは、いわゆる競争主義社会への適応ではない。彼ら自身が満足する価値ある人生の創造である。

HAJA Center スタッフであり、Yooja Salon を起ち上げ、代表となった Akii に、HAJA の哲学は、「韓国社会に対するラディカルなアンチテーゼではないか」との質問を行った。彼は、その問いを否定しなかった。しかし、その一方

で、HAJA の実践が ‘창의적 학습모델’（クリエイティブな学習モデル）として社会的に認知され、権威主義的文化をもつ韓国の企業に参加することが困難な若者達がエンパワメントを追求する実践体であることへの社会的信頼が生じていると報告した²⁾。

2-1 HAJA の哲学は若者に何を求めているのか

HAJA Center の公的名称は“Seoul Youth Factory for Alternative Culture”である。この実践は、IMF ショック以後³⁾、深刻になった若年者の失業の克服策の一つとして、脱工業化モデルのキャリア教育とオルタナティブな雇用の提示として始まった。

HAJA を支え発展させてきた職員は、初期には386世代⁴⁾が中心となっていたのではなからうか。386世代の一部が今日の中央政権で中心的な役割を担っていることは否定できない。しかし、その一方で、NPO 運動や地域運動の組織者となっていることも事実である。

もちろん、彼らは、そこで1980年当時の民主化運動の絶頂期に求めた社会の劇的な変化を求めているのではない。HAJA で求めているのは、グローバル時代における働き方であり生き方の創造である。

HAJA で実践した後にひきこもる若者を対象とするサロン（社会的企業：Yooja Salon）の代表となった実践者 Akii が語る。

Haja というのは「やりましょう」という意味だが、自分のやりたいことが全く何かわからない人がたくさん来所するようになった。やりたいことと成功は異なっている。下部構造と上部構造の話だが、私が考える韓国の問題は、下部構造はしっかりしてきたが上部構造が問題を多くはらんでい

る。今の状況は、下部がだんだんと崩壊してきている。上の部分はまだ期待されていない。

韓国の場合には下部に比べると上部は近代化の速度が速かった。例えば、昔は労働者がデモを起したりして、問題を解決しようとしてきた。今は労働者の連帯が国際的な分業によって難しくなっている。モノの力が強まってしまって、人が大切にされなくなってしまっている。昔は自分の将来は見えていたが、今は明日がわからない、急に人生がストップしてしまうことが多い。

今は混乱しているが、それが当たり前、社会が混乱しているのは当たり前だということを伝えていきたい。社会がそうなっているから自分が無気力になっていることはありえること。自分のことが自分の責任だと思ふようなことはしないようにしてほしいと思う⁵⁾。

彼の「自分のやりたいことが全く何かわからない人がたくさん来所するようになった」という語りは、嘆きではない。これは、韓日間わず若者支援者が常に向き合っている課題である。ただ、その状態は、若者に責任があり生じているのではない。

今日、若者達は「昔は自分の将来は見えていたが、今は明日がわからない、急に人生がストップしてしまう」という危機感と当たり前のように直面している。Yooja Salon の別のスタッフが自己の人生を次のように語る。

A: 子どもの時からたくさんの夢があって、新体操の選手になりたいとか。やっぱり母親に反対されてしまった。選手をやっていたが辞めて、放送局やメディア等に興味を持つようになった。私が大学に入ってから、ある日、気に入る分野が社会学の学者だった。最初はフランス語学科に入った

が、いろんなことに興味があってたくさんの授業を受けた。夢をあきらめてから社会に対して疑問を持っていたので社会学で社会の矛盾を明らかにしたいと思った。自分の夢をあきらめざるを得なかったのは母親のせいというよりも社会が考える成功のあり方が問題と思った⁶⁾。

若者支援者は、若者達が主体的に自己の人生に立ち向かうことが困難になっている現実と出会う。私たち支援者が彼らに用意できるのは、彼らが意欲的に参加できる日常である。この支援者 A も、Yooja の実践が自身の夢を可能にする為に何が必要かを懸命に考えている。

HAJA Center の代表である趙恵貞は、HAJA Center は、「単一の“国民”を作り出す原理とはまったく異なり、多様性を尊重する空間であり、その中で自分の独特さを悟り、自分の求めることをなしていく所である」（趙恵貞、2006）ことが民主主義の原理に従って生成される空間であると述べる。

スタッフ A が「自分の夢をあきらめざるを得なかったのは母親のせいというよりも社会が考える成功のあり方」と語るように、今日の社会での支配的な価値観が若者の生きづらさを創り出す大きな要因となっている。

「自分のやりたいことが全く何かわからない人がたくさん来所するようになった」からこそ、その若者達に、HAJA マインドを獲得して欲しいと、スタッフ達は考える。それは、まさに「自分のことが自分の責任だと思わない」力であり、「社会が混乱しているなかで自身が無気力になっている」事実を知ることができる力として捉えているのではなからうか。

Yooja Salon に参加するひきこもりの若者達に Akii が願うのは、若者達とともに、彼らスタ

ップが多様な人生を送ることができる力を獲得することが可能となる空間を創造することである。

2-2 HAJA Center および Yooja Salon の哲学 にみるソーシャルワーカーの立ち位置

HAJA Center や Yooja Salon のみでなく、韓国のいくつかの支援の場で、かつて民主化運動の担い手であった多くの地域実践家と出会った。その実践家達のなかでも、国民基礎生活保障制度に基づく自活事業（自活支援センター）の実践を担う者達は、まさに386世代であり、彼らは、地域文化の主体を育てる日々の実践に取り組むとともに、次の世代の実践者を育てていた。2010年9月に蘆原地域（ソウル市北東部）教育福祉投資優先地域支援事業事務所⁷⁾を訪れた。その実践に福祉系大学から実習として学生達が参加し、地域で貧困の事実を学び次代の実践者として育つ姿があった。そこには、386世代の研究者達と現場で働くその世代の人達の地域文化を創造する協働があった。その実践は、まさにソーシャルセツルメントの再興を感じさせる実践であった。

今日、社会福祉実践では、実践哲学が軽視される傾向があることを危惧する。ヒトを対象とする全ての取り組みのevidenceが、量的検定による実践効果測定のみで明らかとなるものではない。その実践で人が安寧を得ることができているかどうかは、その人が所属する集団やコミュニティさらには社会（地域・国家）で、彼らが生活主体となり得ているかどうかが問われなければならない。

筆者は、社会的企業である HAJA Center や Yooja Salon をソーシャルワーク実践として捉え、その主要な実践哲学がリカバリーにあると

考える。Anthony は、リカバリー過程を、機能的障害が明瞭な者のみがたどるプロセスと捉えない（Anthony, 1993=1998）。

回復は極めて個人的で独特な過程として描かれる。それは、その人の態度、価値観、感情、目的、技量、役割等である。疾患によりもたらされた制限つきではあるが、満足感のある、希望に満ちた、人の役に立つ人生を生きる道である。回復は、精神疾患の破局的な影響を乗り越えて、人生の新しい意味と目的を創り出すことでもある。精神疾患からの回復は、病気そのものからの回復以上のものを含んでいる。精神疾患を持つ人は、自らに取り込んでしまった偏見から、治療環境の医原的影響から、自己決定の機会が乏しかったことから、仕事していないことの否定的影響から、夢破れたことから、回復する必要があるかもしれない。回復はしばしば複雑で時間のかかる過程である。

Anthony は、なんらかの弱さ（困難）をもち排除される者達が社会の主体となり、文化を創造し発展させる過程として、リカバリーを捉える。

その過程に参加するソーシャルワーカーの立ち位置について、Yooja Salon のスタッフ達は、次のように語る。

筆者：これはスタッフに尋ねたいのだが、Yooja に来ている若者達は、韓国の若者達の中でも幸せだと思うか？不登校や中途退学も非常に幅が広い中で、Yooja に来られない人もいると思う。そういう意味で幸せか？

スタッフ B：幸せかどうかは自分でないとわからないが、逆に私はこの人たちと過ごす時間が大事

だし、一緒に過ごすことがすごく楽しい。これが幸せかどうかは置いておいて、何かを一緒にすることが素晴らしい。これが出会いの基本でしょう。

スタッフC：来られない人と比べれば少なくともこちらでそういう人たちの立場を理解してくれる人達と過ごせる。でも、これが根本的な解決になるのかと言えばわからないが、少なくともここで記憶を大切にしておいて他の人と接触してほしい⁸⁾。

スタッフBの語りに、不全感や失敗感に拘束される自己から自由になる場として Yooja Salon を求める若者の姿と、若者達が人間関係における問題解決力を向上させることを計画する実践者の姿をみる。

Yooja Salon スタッフの第一の立ち位置が、まさにそこにある。それは、社会的諸矛盾と対峙し、若者と共に社会的諸課題と向き合う姿勢である。

第二に、同年齢集団での学びのなかでの主体的な育ちを見守る人生の先輩としての立ち位置がある。スタッフCが「少なくともここでの記憶を大切にしておいて他の人と接触してほしい」と語る背景には、彼自身がミュージシャンとして活躍するなかで貴重であった同年代の仲間との関わりを Yooja で保障したいとの思いがある。

さらに、Akii は Yooja Salon の五つの実践哲学と集団との関わりを次のように語る。

「学校よりもコミュニティが重要」ということで。教育や講義ではなく、仲間集団のコミュニティが子どもたちを教え、治療すると考えているため、私達は受講生同士の相互作用を観察しながら教育プログラムを柔軟に適用しています⁹⁾。

リカバリーは、単に疾病からの回復を意味する言葉なのではなく、疾患を抱えて生きていく自分自身の人生を、まるごと捉えなおし、その人生に意味・意義を見出していく過程を意味する。そのリカバリー過程にとって、集団は不可欠な存在である。

今、若者達がおかれている集団は、我が国で高度経済成長以降、その質に多くの疑問を抱かされるものであった。山本敏郎（1986）は、かつて次のように指摘した。

今日、大人社会における管理主義的上下関係、民主主義の空洞化の風潮、現実主義＝埋没主義の思想、個人主義の精神は、学校や学級のなかに、そして子ども・青年の意識と行動のなかに鋭く反映している。またその一方では、民主的集団のなかで育てられた子ども・青年は、こうした非民主的な社会的価値・規範の変更を意識的に求めている。

今、そこにある若者の“集まり”が、若者に生きる力を与えるものになっているのか、たとえそれが同じ課題を持つ者のあつまりであったとしても、若者に生きる力を与える集団であるのかを問わなければならない。

本節で述べてきたように Yooja Salon のスタッフ達は、今、職員集団を民主的に運営するとともに、そこに民主的な仲間集団を創造することを自己の立ち位置としている。そこには、まさにスタッフが、当事者と自己のリカバリー過程を共有し、若者達と他の人々、社会を結びつける橋になろうとする立ち位置がある。また、スタッフ自身が自身のリカバリーと向き合うなかで、若者達とそのスタッフと共にいることに安心を見出している事実を確認できた。

3. Yooja Salon の哲学、方法と課題

ひきこもる若者にとって回復とは、いかなる状態をさすのであろうか。筆者は、かつて、ひきこもり支援は、適応主義的实践観を克服することが必要であると述べている（山本，2009，2011）。

今日の新自由主義社会では、労働現場を襲う競争主義的かつ能力主義的支配への適応が強られる。そこでは、非人間的生活を強いられ、多くの若者を不安な状態にしている。対人関係になんらかの困難を持つ若者達のなかには、その疎外された労働への過適応を図ろうとシメンタルヘルス上の深刻な状況におかれる者もいる。これは韓日に共通して生じている若者の生存・発達の危機として捉えることができる。

本節では、Yooja Salon の哲学と方法を我が国のひきこもり支援と比較検討しつつ、両国に共通する若者の生存・発達における今後の実践課題につき考察を加える。

3-1 無重力青少年とは

Yooja Salon の哲学と方法を検討する前に、Yooja Salon の事業概要と事業目的につき概観する。

Yooja Salon ではひきこもりあるいは隠遁型ウェットリという用語を使用しない。彼らは、無重力青少年という概念を提起する（Akii, 2012a）。

韓国社会において引きこもりに対する定義は明確ではない。従って我々は引きこもりを論じる前に、「韓国社会において引きこもりとは誰/何か？」ということ問うてみなければならない。「ニー

ト（NEET）」は周知の通り ‘Not in Education, Employment, or Training’ の略語であり、自発的な求職断念者を意味する用語と言える。しかし韓国では、主に「ニート族」という単語を使いながら、「パラサイト族」に準ずる軽蔑的な意味で使われている。また、失業統計が発表される際には「青年失業者」の中で求職を放棄した人の類義語としても使われている。ニートという用語が徹底して「労働市場」の観点から使われているわけである。一方、「引きこもり」は「隠遁型一人ぼっち」と翻訳され、非社会的で対人恐怖症のまま社会生活を拒否する個人を意味している。これは引きこもり化の過程に含まれる社会問題を見逃すことで、引きこもり現象を個人の心理的な病理現象としてのみ見なす結果をもたらす。

Akii のこの指摘は、ひきこもりを生理学的・医学的観点から捉えるのではなく、社会的排除とのかかわりで捉えるものである。筆者は、ひきこもりを、あえて社会的ひきこもりと呼称することにこだわってきた。これは、ひきこもりの背景にある社会的要因を軽視してはならないとの思いからである。

Yooja Salon では、韓日双方で使用されているクライテリアとしてのひきこもり定義ではなく、ひきこもりやニートの若者達を状態像から“無重力青少年”と命名した。その思考の背景には「ニートやひきこもりのような限定的で軽蔑的な言葉で呼ばせない」という、ニートやひきこもりが持つスティグマ性とどう向き合うのかという思いがあった。さらに、彼らは、「社会的な現象（無重力化傾向）を問題化しながらも、対象（青少年たち）に顔のないグループの一員としての烙印を押さない」ことと、「誰もが人生のある瞬間に無重力状態に陥る可能性が

ある」という意味を含めて「無重力青少年」という言葉を用いている。彼らは、この言葉を用いることにより「まずは個人の過ちではなく、社会的な力学（dynamics）の中で起こった事件だ、との事実を認識することが重要だ」との考えから、Yooja Salonのスローガンとして‘It’s not your fault’を設けたのである（Akii, 2012b）。

ひきこもりやニートは、韓日いずれにおいても、人生のある瞬間、しかもそれは思春期から青年期のある瞬間において自己が歩むべき方向を見出すことが困難となり生じる。しかし、適切な対応がない時、それは瞬間にとどまらず長期にわたる状態となる。この長期にわたる状態を、いかなる言葉で表現したとしても、その状態に対するスティグマはつきまとうものである。ただ、我々は、その状態のなかにある若者達の可能性に着眼しなければならない。彼らを、病んでしまった者あるいは状態として捉えることから、なんら肯定的意味が見出されない。Yooja Salonでは、“肯定的な意味を内包する”状態を、「無重力青少年」のなかに見出している。

3-2 主体としての育ちと若者ソーシャルワーク

社会的企業であるYooja Salonが、韓国の若者支援のすべてでないことは言うまでもない。ただ、Yooja Salonの実践は、今、若者と共に育ちあうスタッフが若者との協同的な課題解決プロセスを辿っていると考えられる。若者ソーシャルワーカーは、常に若者達の主体としての育ちを実践目的におこななければならない。主体としての育ちとは、実践場面で当事者の権利を保障するという至極当然のことをさすのではない。

日置真世（2009）は、「支援を受ける側」として支援を再考した際に、主体としての育ちを考える重要な要素である「協同的に課題を解決するプロセス」の存在が実践への主体的参加の第一歩であることを指摘している。

筆者は、若者と育ちあう場面に「支援」を強要することに抵抗を持つ。佐藤洋作（2006）は、若者自立支援の基本的枠組みを「若者が地域における街づくりや地域おこし等への社会参加を通して、人と出会い豊かな体験を積みながらシチズン（社会参加主体）としての力量を育んでいくこと」と定義する。この主体としての力量を育んでいく過程こそ協同的課題解決プロセスであり、市民が市民としての発達を迫るプロセスではなかろうか。

Yooja Salonは、危機介入を含めた初期介入時のアセスメントを「専門的」に実施する実践体ではない。ただし、自身の前に現れた若者をどう判断するかを集団で議論する。Akiiは、次のように語る。

我々（Yooja Salon）はアウトリーチのプログラムではないので。もちろん、おっしゃったような人（自宅から外に出ることができずに苦しんでいる等）が相談に来るケースもあります。親が相談に来るケースもあります。でも、結局来られないことがあります。これについてはもちろん我々も取り組みが必要だと思うが、どうすればいいかわからない。逆に質問したいのですが、学校をやめてそういう状況になってくる若者の状況は幅が広いと思う。軽い人から。Yoojaに来られるようなレベルにない人をどういうふうに扱ってあげればいいのか悩んでいる¹⁰⁾。

ここに、現場で若者とスタッフが育ちあう姿

をみることができるのではなからうか。もちろん、ソーシャルワーカーとしての専門性を否定しているのではない。

むしろ、ソーシャルワーカーとしての基盤である社会正義と人権を若者とともに追及することを専門性とするのが若者ソーシャルワーカーに求められているのである。

隅広静子（2010）がクリティカル・ソーシャルワークにおけるクリティカル概念を5点に整理している。そのなかの一つに、「対等な関係・対等なラポートがあるふりをするのではなく、相互に尊敬し、相互に情報を交換し、相互にオープンで明確なコミュニケーションをすること」がある。これは、支援者—被支援者の関係性が克服された関係を意味するのではなからうか。

隅広がいう「相互に尊敬し、相互に情報を交換し、相互にオープンで明確なコミュニケーションをすること」ことや、日置が指摘する「協同的に課題を解決するプロセス」に自身をおき、自身を実践主体の一員として育てあげる力こそ、ソーシャルワーカーの専門性として求められるものであろう。

若者ソーシャルワークの実践者達は、今、若者が出会う諸課題が深刻であり、そのニーズが多岐にわたっているが故に、既存の制度や政策を活用するのみでは不十分である為、彼らのニーズを実現する為に若者を含めた地域住民と新たな実践や政策、運動を創造していかなければならない。若者ソーシャルワーカーが、地域と関わり住民とともに新たな仕掛けをつくる運動の担い手となっていく育ちが実践のなかで保障されなければならない。Yoojaのスタッフ達がその育ちを保障される為に、今、Yoojaやそれを囲む地域の課題は大きい。

3-3 自己課題への気づきと実践参加

協同的な課題解決プロセスを、方法論として捉える時、当事者が初期段階から自己の課題と向き合う仕組みを保障する実践構築が必要となる。その一つが、当事者参加によるアセスメントの実施である。このアセスメントは、当事者の課題を明確にする作業であるとともに、実践体の課題を明らかにする作業でもある。

いわゆるプロスタッフ達が、当事者の「病理」を抽出分析し、彼らを治療対象とする取り組みには、協同的課題解決をみることはできないであろう。

自己の課題と向き合いづらい若者達が参加する場であるが故に、その場が、彼らの可能性を当事者とともに発見する力をもつ実践の場となる必要がある。共通した客観的根拠に基づくアセスメントを、当事者を含めた集団で実施することこそが協同的課題解決への第一歩ではなからうか。

Yooja Salonの実践を検討する資料はまだ十分でない。しかし、いくつかの若者の言葉とAkiiの語りからこれらの点につき検討を加える。

Yooja Salonを利用している17歳の若者が、Yoojaに参加し始めた頃のことを語る。

以前部屋に閉じこもっていました。家族の紹介で精神科のお医者さんを紹介してもらい、そこで1年間相談を受けました。でもそんなに役に立たないと思った。その先生が1388¹¹⁾という青少年の団体を紹介してくれました。そこを6カ月利用しました。でも、そこで逆に悪影響をうけてしまいました。その時、相談の先生がYoojaを紹介

してくれました。1388の職員があんまり理解してくれなくて、自分の暗闇みたいところだけ、すっとさしたので、それで私が怒りをもちました。その人も、自分は役に立たないと思い、代わりにこちらを紹介してくれた¹²⁾。

彼女が支援を受けた“1388”は、青少年相談センターが危機青少年を対象として開始した危機介入プログラムである。それは、危機介入プログラムとしては評価できるものであるが、彼女は、このプログラムで活用した危機青少年支援センターを「自分には役に立たない」と判断したのであろう。

若者達が自己課題に気づくのは、その課題を自己が向き合わなければならない課題として受容した時ではない。おそらく、当初は“なぜか辛い”“人と関わるのが嫌”“いろいろ頑張ってもうまくいかない”等々の感覚に押しつぶされ不安と葛藤で苦闘し、その課題から回避しようとする。

支援者がその苦闘する若者を受容しようと試みる時、人との関わりが困難であった彼らは、その関わりを重荷に感じることがある。彼らは「僕のことも何か何も解ってないのに」という思いを持ち、「自分の暗闇みたいところだけ、すっとさした」支援者が、自己のころへの侵襲者として機能するときに感じることがある。

若者達は、人生での苦闘をあえて言語化することを強要せず、彼らと共に学び発達する大人たちを求めている。自己の課題に気づけない若者達に教条的かつ経験的に臨床技術を利用し介入しようと試みる大人達に、彼らは実践的魅力を感じることはできない。さらに若者達は、彼らが参加する実践の場で生き生きと活動し、苦しんでいる同年代の仲間を求める。若者達は、

何か教えを乞う存在として同年代の仲間を必要としているのではない。その場で実践を創り上げる仲間として必要としているのである。

協同的な課題解決プロセスは、共に自己の課題と出会い、向き合うことを第一歩としなければならない。

3-4 実践参加と地域生活主体としての育ち

Yooja Salon は、時代的脈絡を反映している若者達の課題を解決する主体は若者であると考え、若者達と共にコミュニティを築きあげることを目指している (Akii, 2012a)。

「無重力状態」は心の問題であると同時に労働の問題である。無重力化の原因は、単なる失業や自主退学だけでなく、競争社会の圧迫感から生まれる無力感であるからだ。無重力青少年は、社会生活に対する負担感のために、社会復帰する上で困難を経験する。彼らは労働市場だけではなく社会システムから排除され、孤立しているも同然だ。

Yooja Salon 代表の Akii は、社会システムから排除され孤立する若者達が地域社会の主体として育つ仕掛けづくりを提起する。その仕組みは、「家の外で悠々自適プロジェクト（再活力化）」「社会問題化－初期発見および予防システムの確立」「軽くて負担の少ない雇用ネットワークの構築」「無重力出身の『ロールモデル』の発掘」「韓国内における日－韓交流の拡大」である。

Yooja に参加しはじめた頃の若者が語る。

今の（社会）システムが、勉強だけやってというシステムだから、自分は勉強をやりたくなくても

そういうシステムだから、もちろんそういう人たちは幸せにならないんじゃないか。Yooja 自体が自分をかえるとか、そういうことはないと思う。Yooja に来て、ここがすごく暖かいところだった。精神的な癒しを受けましたが、そういう有用な変化とかはないが癒される場所¹³⁾。

この若者の「有用な変化はないが癒される場所」との語りは、安心できる居場所としての Yooja との出会いを意味する。ただ、この居場所での実践を通して「勉強だけやってというシステム」が自身の幸せを築くものでないとの価値観が間違いないものであることを確信する。

Yooja Salon は、音楽を通して地域との関わりを創ることを計画する。彼らの実践的母体である HAJA Center と Yooja Salon には、若者が地域生活主体として育つ為に共通する実践のフレームワークがある。それは、代案教育と新たな働き方の追求である。

彼らは、そのフレームワークの下でプロジェクト創出に取り組む。HAJA が取り組んできた代表的なプロジェクトであるノリダン（2004）や Organization YORI（2006）は、文化部門でのインキュベーションを目指すものであり、その実践を通して地域の文化要求に応えることを計画している。Yooja Salon は、音楽を通してその取り組みを行おうとしている。

HAJA Center が誕生した1990年代後半、HAJA は、韓国の学校が合わなかった子どもや若者にとってひとつの“道しるべ”のような空間であった。実践は、常に発展し続ける。HAJA には、7つの約束¹⁴⁾がある。今、HAJA Center が、代案教育センターとしての機能からインキュベーション機能を主とするセンターとなる過程で、支援者達のなかでは、この7つの約束

についても変えなければならぬとの議論が生じている。

若者達が地域生活の主体となる時、地域に若者支援システムが準備されているかが問われる。そのシステム（しくみ）には、“居場所”“就労支援”“すまい”が、不可欠な要素となる。なかでも“居場所”は、彼らが次代の社会の担い手として求められる文化を創造する場でなければならない。

佐藤洋作（2004）が、「今後、『自己責任』にもとづく市場主義が押し進められていくなれば、人はますます関係形成力（他者と交わる能力）が奪い取られていき、自分の殻のなかに閉じこもってしまうのではないか」と指摘するように、今、若者支援体は、若者が他者と関わる力を獲得する為の哲学と方法を獲得しなければならない。その実践体が、インキュベーション機能を強く持つものであればこそ、そこで常に問われなければならないのは、その起業と実践の哲学である。

4. 今、Yooja Salon に期待されている役割

本節では、Yooja Salon を利用する当事者及びスタッフを対象とする調査により明らかとなった Yooja が韓国のひきこもり・ニート支援体として果たす役割につき考察を加える。

4-1 今、どのような若者が Yooja Salon を利用するのか

韓日比較調査にあたって、その仮説を、激しい競争社会におき強いられた適応と排除、儒教（孝）思想による長男及び男性の子どもへの過期待が両国に共通して存在するのではないかということにおいた。

筆者は、その仮説のもとで2つのグループインタビューを行った。そこでは、激しい競争社会に適応しなければならないとの強迫的な思いを持つ親と若者たちが、社会との関わりで持つ葛藤をみた。

まず、最初のこのグループインタビュー¹⁵⁾の対象は、Yooja Salon を利用する若者達ではない。その者たちは、現在、大学を終え就職を目指していた。彼らに「競争についていけない学生たちは、以後どのようになるのか」との質問を向けたところ「彼らには、特に関心がない。自分のやりたいことをやればいい」との答えが返ってきた。さらに、「大学受験中は機械、大学入学後は人間と言われるのが韓国の当たり前です」との答えもあった。

この若者達は、韓国社会におけるエリート層ではない。むしろ、大学卒業後の進路に苦慮している者が主であった。彼らの回答を聞きながら、自身の発達上の危機に気づくことが困難になっているのではないかとの思いを持った。激しい競争のなかで就職さらには、自己の人生を勝ち取っていかなければならない彼らは余裕を喪い、自己の状況を客観的に評価することが困難になり生きづらい若者として存在していたのではなかろうか。

現在韓国は、家族形態が変化し、少子化が進行するなかで子どもへの期待が並々ならない状況を呈している。グローバル化の流れのもとでの目覚ましい大学進学率の伸びが生じ、渡り鳥家族の増加（金，2009）、フォーディズム体制下のスペック競争（福島，2009）の激化による負け組にならない為のものが若者達の社会で生じている。そうした変化は、若者たちから豊かな発達を奪っているのではなかろうか。

ただ、彼らに親との関係を聞いたところ、父

親は「抑圧するが、父親だし年上だから権威はある。」「たとえ、意見が違ってても聞くべきである。」「年上だから尊敬すべきである」という意見を共通して持っていた。

次に、2012年3月にYooja Salon のメンバーを対象にグループインタビューを実施した。ここでは、若者達と親との関係で先のインタビューで得たものと異なる思いを強めた。

筆者：韓国の社会は競争社会である。あなたが、今、Yooja のプロジェクトに参加することに抵抗や不安、葛藤はないか。また、お父さんや、お母さんはこのプロジェクトへの参加に理解がありますか？

C：普通の親と同じように理解があるとは言えない。でも大切な時間だと思う。

D：私は以前から一人だったので何かしなければと不安があった。Yooja Salon に参加することで何かできると思って不安ではなくなった。そこで競争社会や社会システムについても学ぶことになったので、これからのことについて準備することができると思う。

E：いつからか学校に通っている子どもたちがうらやましいと思うようになった。それは学校に通う子は学校に通うだけで何かしていることになるが、学校に通っていない私たちは、いつも何か考えてしていなければならない。だから、うらやましいと感じる。来年は軍隊に行かなければならない。現行法では高卒でなければ軍隊に入る義務はないが、本国会で審議中であり、法律が変わり、軍隊に行かなければいけないかもしれない。

筆者：あなたは中二で学校に行かなくなったそうですが、そのことで両親や家族に何か変化があり

ましたか？

E：家庭の中での問題はなかったが、学校の中で先生との間で問題があった。小学校の頃に隣の学校に転校することになった。自分が転校する学校に同じ学校から先に一人転校していた。その子が転校先であまりいい印象を与えていなかったのので、自分も悪い印象を受けた。中学に入るとそういったことはなかったが、再びクラスの中に入りづらくなり学校に行かなくなった。

筆者：その時、家族は無理矢理学校に行かせようとしたりしませんでしたか？

E：そういうことはあまりなく、病気だからということだった。あまり親とケンカした記憶がない¹⁶⁾。

彼らの親達は、フォーディズム体制下にいる年齢層である。

その親達に対し、Eの「家庭の中での問題はなかったが、学校の中での先生との間で問題があった」という語りや、Cが「普通の親と同じように理解があるとは言えない。でも大切な時期だと思う」といった語りから、親からの抑圧をさほど強く感じていることは推察できない。また、Dの「競争社会や社会システムについても学ぶことになったので、これからのことについて準備することができる」と考えることができるようになったという語りには、家庭で競争社会に対する閉塞感を言語化する様子が浮かぶ。

彼らの親世代やその子ども達にとって、88万ウォン世代（朴，2007）の出現は、若者が移行期への夢を持ってなくさせるのに十分な状況であった。そうした社会的な閉塞感を生じさせ、親と子が共に向き合う課題が明確になってきているのではなからうか。

Akii は、2005年頃を境に HAJA に大きな変化が生じたと語る。

Haja Center は、努力があって、自発的で、受験競争を拒否する、少数の人への先進として役割を果たしたのではないかと思います。Haja が悪いという意味ではなくて、そういう人たちが発揮できるように、Haja Center も先駆けているということなのですね。2005年度に入ってから Haja Center の方向性が変わるのですね。理由として、2005年度以降、このような人があまり見えなくなって、ニートの性格をもった人たちが Haja Center に来ることになって、Haja Center も方向性を変えないといけなかったのです¹⁷⁾。

現在の Yooja Salon に集まる若者達の親は、HAJA Center の初期を熟知している386世代かもしれない。しかし、今後、Yooja Salon を利用する層は、おそらくそこをリカバリーの場として活用する層となる可能性が高い。

2012年3月のグループインタビューの対象となった若者達も、精神科病院に通院している者や公的な相談機関で心理相談を受けていた者、いじめの体験がある者等と、ほとんどが何らかの精神保健福祉ニーズを持つ者達であった。

我が国の若者支援機関の調査¹⁸⁾ ではニート状態にある若者の49.5%が「ひきこもり」経験があり、それと同率の若者が「精神科又は心療内科で治療を受けた」経験があることが明らかとなっている。Akii が2005年以降ニートの性格を持つ人達が、HAJA を利用するようになったと述べるが、この精神保健福祉ニーズを持つ人達が2010年の Yooja Salon が開始されて以降、Yooja メンバーとなることは至極当然のことである。

4-2 Yooja Salon に求める実践

前章までで Yooja Salon が韓国における若者支援の実践体としての力を持つものであり、そこを利用する若者達が Yooja Salon を自己の発達との関わりで必要としている事実について述べてきた。さらに、前節では、今、Yooja Salon を利用する韓国の若者達についての私見を述べた。そこで、本節では、韓国における若者なかでもひきこもり・ニート支援として意味のある実践を展開する Yooja Salon が若者支援体としてどのような課題を持つのかにつき論述する。ここで、筆者が、今、Yooja Salon を考える際に立脚したいのはリカバリー理論と実践、運動である。

Yooja Salon が社会的企業として若者達の就労や地域の音楽文化の普及を目指していることの重要性は言うまでもない。しかし、そのみで若者が地域でリカバリーすることは不可能であろう。Yooja Salon は、今、韓国の多くの実践者と連携実践を展開する準備を行う必要があるのではなかろうか。その為には、ソウル市青少年相談院やソウル市青少年相談センター、さらには多くの精神科医療機関との協働システムが必要であろう。

次に求められる実践は、現在、Yooja Salon が計画している実践計画との関わりである。Yooja Salon は、その介入の段階を以下のように計画している (Akii, 2012a)。

第1段階：無重力青少年のエネルギーの回復を助ける「家の外で悠々自適プロジェクト」

第2段階：「早期発見システム」を確立

第3段階：「軽い雇用ネットワーク」を構築

第4段階：社会参加

彼らは、この第1段階の為に、基礎コース、

深化コース、修了後のポストコースを準備している。基礎コースの目的は、楽器を習うことで自信を回復し、他人との関係に慣れていくことである。そのなかで「今のままでも大丈夫」と思えるようにすることを目指すが、この時期を3ヵ月間としている。この3ヵ月間で、若者達が自宅から出、仲間と出会い、楽器と出会い、自己肯定を高めることが可能となるか。この期間に関し実践効果との関わりで疑問は残る。

彼らは、3か月の間に「悠々自適青少年」へと変わると考えられ、修了後1か月ほどの休息期間を持つ。

その後、深化コースに進む。ここで、バンドを結成し、バンドメンバー達と自分達だけで交流し合い、そこで生まれる葛藤を解決することに取り組む。深化コースは、「(難しく見えたりやりたくないことも) 取り敢えずやってみよう」をモットーにする。

Akii は、この基礎コースと進化コースに関して次のように述べる (Akii, 2012a)。

基礎コースでは憂鬱から大丈夫へと表面的な変化を大きく見せたとすれば、深化コースでは、こうした課題から来る様々なストレスにより、再び浅い憂鬱と無重力の世界にしばらく戻ってしまうこともあります。しかし私達は、最後まで待ちながら、「うまくいくさ」という考えを持つのです。もはや私達がしてあげられることは、事実、そうして信じてあげる以外にはないからです。幸いなことに、大部分の悠々自適青少年たちは、深化コースで自己の人生のペースを安定化させる姿を見せてくれています。

次が、ポストコースである。これは、Yooja Salon の正規プログラムではない。Yooja Salon

では、このコースで定期的に修了生を招きモニタリングを行い、彼らが安定を取り戻していけるように配慮する。

当初の基礎コースの短さは気がかりであるが、彼らが目指しているのは、Yooja Salon を利用し社会参加の試みを行っている若者達との継続的な関わりである。

この第1段階との関わりでのYooja Salon の実践への提案がある。自らが統合失調症患者である精神科医のDaniel Fisherが、リカバリーは当事者が当事者の力によって獲得するものであるが、支援の提供者がその過程を促すことができる局面があるとし、つぎの4つの局面を指摘している（2008-2010）。基礎コースにおいて、この4つの局面を臨床的に応用することがYooja Salon に求められていることではなかろうか。

C = つながること (Connecting)

H = 希望を再構築すること (restoration of Hope)

E = 感情や夢を表現すること (Expressing feelings and dreams)

P = 未来を計画すること (Planning one's future)

自宅にひきこもっていた、あるいはニート状態にあった若者達が仲間とのつながりのなかで自身の悩みや葛藤、不安等々を明らかにし、ここに参加して良かったと実感することを可能にする為に、あくまでも臨床的経験であるが3か月という時間には再考が必要ではなかろうか。

第2段階との関係であるが、この課題は、ひきこもりやニートが事例化しがたい韓国において非常に重要な課題である。現在計画している教育機関との連携はもちろん重要な課題である。韓国において、この課題を移行期課題とし

て教育・福祉・保健・医療・就労を統合した若者支援政策を立案し、Yooja Salon が高校にアウトリーチするまでには時間が必要かもしれない。しかし、彼らが考えている第2段階のシステムを創り上げる為にはその手立てが必要であろう。さらに、現存するソウル市青少年相談院との連携により、Yooja Salon と公的機関が連携し早期対応に関する情報を発信する協働システムを早期に確立する必要がある。

第3・4段階ともに、その協働システムが基盤となるのではなかろうか。第3段階は、社会的企業においてある程度可能であろう。しかし、今後、音楽のみならずYooja Salon を利用する若者のニーズに合った企業をインキュベートする必要があることは言うまでもない。

5. 軍隊があるからひきこもらないという

「論」との関わりで

軍隊とひきこもりとの関係に関しては、本研究の主要なテーマではないが、韓国のひきこもりを考える上で検討することが必要であると考えた為、2011年8月24日夜にソウルで韓国国防軍の専門相談官O氏を招き韓国の支援者や研究者と交え議論を行った。

韓国国防軍では、2005年から軍隊に心理職が配置された。彼らの仕事の大きな目的は自殺防止と軍隊適応不全のケアである。2007年度に軍隊で自殺した人の原因は、34%が軍隊不適応、20%が家庭の環境であった。

彼は、「軍隊があるのでひきこもりにはならない」という議論は根拠のない議論であると述べた。

韓国国防軍でも、入隊後にひきこもりが対応事例となる事実がある。軍隊入隊後、なんらか

の脆弱性が見つかり保護関心兵士と呼ばれる。その兵士が500人中30人はいる。また、その兵士は、A、B、Cの級に分けられるが、Aが一番困難な人達であり、その約2割がひきこもりや回避性をもっている。さらに、彼は、次のように語った。

軍隊に入れて、なんらかの被害にあうだろうと思っている親は精神病院で疾患の診断を受けて軍に入れないようにする。ただ、韓国では軍をでてはじめて一人前、男という感じがあるから、軍隊に入りたい、という人もいるでしょうね。軍隊を途中で出てしまった人は、軍でも適応できなかつたから、社会でも適応できないだろうという見方もある。だから、軍を途中で出たくないという思いもあるだろう。ちょっとデータで説明したいのですが、軍隊を不適応で辞めた人は、2006年には、3099名、2007年には3408名、2007年度3689名、2009年には3880名とだんだんふえている。二つの種類があり、障害が診断される場合と、まわりで、このひととは一緒に軍生活を送れないということを言われて軍を出る人もいる¹⁹⁾。

O氏は、社会福祉士であり心理専門官であるという立場から事実を淡々と語った。彼は、韓国において軍隊への入隊は、その国で職業を得ていく上で必要な「関門」であるが、入隊後にひきこもりとしてケアされる事例や軍隊不適応で軍隊を辞める人が増えている事実があると報告している。

O氏は、軍隊で対応したひきこもり事例を通して、次のように語る。

人間って誰でも弱点を持っている。あるところでの努力が不足だということ落ちてしまう。共同

体というか、それぞれが持つ強みを生かして、落ちた人は待ってもらったり手伝ってもらったり、同じ世界を暮らす人間として生活を創っていく必要がある。自分についての決定権は自分が持っているのではないか。自分を評価するときに、制限された視点から判断するが、それを広げるように相談官は支援している。

軍隊があるからひきこもりとはならないという論は根拠のない論であろう。しかし、軍隊生活を送らないと韓国で就労することが困難となるのは事実であり、ひきこもりを隠し入隊する事実がある。このことから、軍隊入隊がひきこもりを見えがたくする一因となっているとは言えるだろう。

おわりに

第3報では、Yooja Salonをリカバリー実践として捉え分析を加え、我が国の若者支援の哲学・方法との比較検討をおこない、若者支援論を提起する。そこでは、Daniel Fisherの“あなたが「居る」ことができればできるほど、あなたは、あなたが支援している人とともに深く「居る」ことができる”という言葉を基にしながら、そこに「居る」ことが可能となる制度・政策をも検討する。

Yooja Salonスタッフは、それぞれに自己の人生になんらかの課題を持ってきた若者達である。彼らは、それを隠そうとしない。彼らは、その課題で生きづらくなった自身と向き合う為にYooja Salonで若者たちと「居る」ことを選択した。ここに、Daniel Fisherが述べる深く居る姿をみる。韓日の比較研究において重視したことは、両国のひきこもり支援が共有できる哲

学や方法を見出すことであった。この哲学や方法を明確にした若者ソーシャルワークの提起が第3報での課題となる。若者ソーシャルワークは、複合的な課題を持つ若者たちが、“なかま”“すまい”“就労”等の支援を通し社会の主体者として生きることができると総合的支援とならなければならない。

注

- 1) 例えば、間宮らの研究においても、韓国の研究者により報告されているのは不登校等の学校不適応や非行・家出等が主である。
- 2) これは、2011年8月24日の調査時にYooja Salonから筆者が提出していた討論資料の回答して提出されたPPT「니트, 히키코모리 청소년에 대한 한-일 공동연구 간담회」(ニート, ひきこもりに関する韓日共同研究懇談会)に記されている。Akiiは、1976年生まれである。延世大学大学院を卒業した後は大企業に勤務するがバーンアウトし自身の人生を見つめるなかでHAJAに勤務するようになる。
- 3) IMFショックとは、1990年代前半にアジア圏の経済危機が生じ1997年に韓国国内の経済危機が起こりIMFが融資をおこなって経済の危機を立て直しを図ったことをいう。
- 4) 386世代とは、1960年代生まれであり、1980年代に学生運動に参加し、1990年代に30代であった世代であるが、現在はすでに486世代から586世代になりつつある。
- 5) インタビューは、2011年8月25日にソウル市のYooja Salonで行った。
- 6) Aは、1985年生まれの女性である。2004年に芸術大学を卒業している。インタビューは、2011年8月25日にソウル市のYooja Salonで行った。
- 7) 地域間の教育格差の解消を目的とした事業である。都市の貧困地域（「教育福祉投資優先地域」）支援拡大により教育、文化、福祉の連携を強化することを目指している。
- 8) スタッフBは1984年生まれの共同代表である。スタッフCは1985年生まれの会計担当者である。インタビューは2012年3月14日に行った。スタッフBはYoojaに参加前は弘大において若者達で創る音楽のフリーマガジン政策に携わっていた。スタッフCは大学院卒業後幼少期から習っていたギターでバンド活動を精力的に行い現在もギターリストとして活躍中である。
- 9) 2011年8月25日、ソウル市内のYooja Salonでインタビューに実施した。
- 10) これは2012年3月14日に行ったグループインタビュー時に聴取したものであり、若者たちも同席していた。
- 11) ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって—若者問題に関する韓日間比較調査から—立命館産業社会論集46-4 P37を参照のこと
- 12) 1995年生まれの女性。Yoojaに参加して初めて自分のバースデー・パーティを祝ってくれたことに感動し涙を流した。
- 13) 1992年生まれの女性。中学卒業後代案学校に入学するも不適応となり家で過ごす。その後、別の代案学校に進学するも中退する。相談を担当する心理士の紹介でYooja Salonにつながる。現在、大学進学を検討中。
- 14) “やりたいことをしながら、すべきこともする”“年齢差別、性差別、学力差別、地域差別をしない”“どんな種類の暴力も行使しない”“自分の後始末は自分です”“情報によって卑怯なまねをしない。情報と資源は共有”“立場をかえて考える。配慮と親切”“約束は守る。守れない約束はしない”というものである。
- 15) Kさん（女性、84年生まれ）小学生の時に塾に通ったが、それほど本格的に塾に通ったことはない。
Lさん（男性、81年生まれ）小学校の頃から、ピアノや学習塾に通った。中学入試塾に通った。中学3年までは19時まで学校があった。その後、学習塾があった。高校3年生時には、7時30分～22時学校（昼食12:00～13:30 夕食17:00～18:00 自習時間18:00～22時 塾が22時～1時までだった）家族との食事は週末のみだった。
Mさん（女性、83年生まれ）幼稚園から母親

に習い事をさせられた。中学では高校入試予備校に通った。21時まで学校で自習があった為、それ以後塾へ行った。高校では、予備校が早いと21時に終わったが、遅いと23時に終了した。

Nさん(男性, 82年生まれ)自分の興味が無い高校に入学した。大学に行くつもりではなかったが、高校3年で日本語に興味持ち、大学に進学した。夜9時まで学校。高校のときはあまり意欲的に勉強していなかったが、不安感はなかった。

Oさん(男性, 85年生まれ)母子世帯であったため、小学校のときは塾、中学のときは予備校に行かなかった。高校のときはインターネットで授業の講義を受ける。

2009年1月、ソウル市内麻浦の貸し会議室でインタビューを実施。対象者は、当時の通訳が勤務していた大学の学生と卒業生から無作為に選んだ。

- 16) 3人は、Yoojaのプロジェクトに第一期として参加している。スタッフは、この3人を、学校に通っている学生よりクリエイティブで、自立したい生活を過ごしていると言う。3人とも未成年である。インタビューは、2011年8月23日に実施した。
- 17) 2011年8月25日インタビュー。
- 18) 厚生労働省、ニートの状態にある若年者の実態および支援策に関する調査研究, 2006
- 19) 2011年8月24日、ソウル市内のある場所でのインタビューを実施した。

引用参考文献

- Anthony, W. (1993) Recovery From Mental Illness: The Guiding Vision of the Mental Health Service System in the 1990s, *Psychosocial Rehabilitation Journal*, 16 (4), 11-23. (=1998, 翻訳・解説 濱田龍之介「精神疾患からの回復: 1990年代の精神保健サービスシステムを導く視点」『精神障害とリハビリテーション』2(2), 65-74.)
- Akii, 2012a, 無重力青少年のための「重力ネットワーク Network of Attraction」作り方—悠自サロンが目標とする青年支援, 第7回社会的ひ

きこもり支援者全国実践交流会 in 神戸要旨集, 25-29

Akii, 2012b, It's Not Fault—引きこもり問題に対する社会学的アプローチ—韓国社会における「適応」に対する悠自の哲学と実践, 公開シンポジウム“ふつう”への適応からユニークな参加の創造へ—韓日若者支援の現状—要旨集, 43-47

趙恵貞, 2006, 三つの論題: “青少年”とは, ハジャセンターの実験そして村の小さな学校—近代後期青少年問題の解決のためのビジョンと方向性—, 文部科学省平成18年度青少年健全育成中央フォーラム—青少年の自立を支援する地域の取組について—当日配布資料

Daniel Fisher, 2008, Promoting Recovery, T. Stickley and T. Basset (Eds.) *Learning about Mental Health Practice*. Chichester, England: John Wiley and Sons. pp.119-139 (=2010, 松田博幸訳, リカバリーを促す, 大阪府立大学人間社会学部 松田研究室)

福島みのり, 2009, 韓国青年失業問題についての—考察—社会的企業で働く20代を中心に—, *Waseda Global Forum No. 6*, 325-342

船橋晴俊, 2009, 『公共圏の創成と規範理論の探究』2008年度論文集「若者問題の比較分析—東アジア国際比較と国内地域比較の視点—」法政大学社会学部科研費プロジェクト(基盤研究A 2007-2010: 課題番号19203027)

황순길, 권혜수, 장미경, 2005, 한국의 은둔형 외톨이 등 사회부적응 청소년 지원방안, 은둔형 외톨이 등 사회부적응 청소년 지원방안, 47-64

日置真世, 2009, 困難を抱える子ども・若者とその家族への地域生活支援の意義と今後への提言—支援実践を通しての分析と検討, 子ども発達臨床研究, 北海道大学子ども発達臨床研究センター, 45-53

金京姫, 2009, グローバル化時代における韓国家族の変化と挑戦—トランスナショナルな家族を中心に— (=2009, 訳, 張恵英), 立命館大学人文科学研究所紀要92号, 203-228

隅広静子 (2010) クリティカル・ソーシャルワーク

- における「クリティカル」概念の整理の試み—
 ソーシャルワーク教育に必要なクリティカル・
 シンキングの概念確立のために—, 福井県立大
 学論集 第34号, 43-55
- 問宮正幸, 2011, 『若者自立支援の課題に関する特
 別な教育的ニーズに関する総合的研究』（基盤
 研究 B 2008-2010：課題番号20330192）
- 佐藤洋作, 2004, 若者の居場所づくりと社会的自
 立, 子どもの参画情報センター編, 『居場所づ
 くりと社会つながり』126-140
- 佐藤洋作, 2006, 若者の社会的自立をどう支援でき
 るか～若者支援の現場から, 月刊誌「地域と人
 権」2006年10月号, 1-7
- 横井敏郎, 2006, 若者自立支援政策から普遍的シテ
 ィズンシップへ—ポストフォーディズムにおけ
 る若者の進路と支援実践の展望—, 教育学研究
 第73巻第4号, 110-121
- 山本耕平, 2009, 若者のひきこもりを精神保健福祉
 課題としてどう同定するか, 立命館産業社会論
 集45-1, 15-33
- 山本耕平, 2011, ひきこもり支援の哲学と方法をめ
 ぐって—若者問題に関する韓日間比較調査から
 一, 立命館産業社会論集46-4, 21-42
- 山本敏郎, 1986, 教育における集団概念の検討
 (I): 「教育における集団」の独自性を中心に,
 教育学研究紀要, 31: 132-135

第1報目次

はじめに—韓日に共通する課題—

1. 韓日ひきこもり比較研究の目的と背景
2. 韓国の若者支援政策の動向と哲学
 - 2-1 韓国での若者インタビューから学ぶ若者生活
 - 2-1-1 韓国の受験社会の様相
 - 2-1-2 韓国の若者は大学受験とひきこもりをど
う捉えているのか
 - 2-2 若者の生きづらさと家族・学校にみる「暴力」
3. 韓国の若者とひきこもり文化—インターネッ
ト・アディクションへの着眼—
 - 3-1 PCバンは, 若者ひきこもりの文化要因と考
えられるか
 - 3-2 PCアディクション, インターネット・アデ
ィクションとバーチャルな対人関係
4. 韓国における若者支援哲学と方法
 - 4-1 若者支援哲学と人文学
 - 4-2 代案学校にみる自尊心獲得の重視
 - 4-3 韓国におけるひきこもり支援
 - 4-3-1 早期介入, 予防希望を持つネットワーク
 - 4-3-2 緊急対応ネットワーク
 - 4-3-3 ソウル市東部児童治療センターにおける
支援

まとめに変えて

Issues of Support Philosophy and Method to Assist socially Withdrawn Adolescents (HIKIKOMORI) :

Based on comparative researches between South Korea and Japan on youth problems The Second report ; Through research on the Yooja Salon.

YAMAMOTO Kohei *

Abstract: This paper's purpose is to clarify some practical philosophy and youth social work for young people who face transitional development tasks through the analysis of a social enterprise, Yooja Salon, which supports NEET or socially withdrawn people in Seoul, South Korea. There are two reasons for thinking that Yooja Salon is an appropriate subject in making a study of these practices. Firstly, this institution is the only private group supporting NEET or socially withdrawn people. Secondly, although the practical philosophy of the parent organization, HAJA Center, appeared to criticize competitive society at first, the practical outcome of creating alternative lives received a high evaluation by not only the Korean government but also that of Japan. In addition to my involvement with Yooja Salon's members, I held a research session with staff persons who also experienced difficulties in Korean society. These staff make collaborative efforts in tackling each developmental task with the members. Both of them are civilians as sovereigns. This is what they call the recovery process. In conclusion, to study the practice can connect universal youth philosophical constructs and missions in Korea and Japan.

Keywords: youth support, South Korea-Japan comparison research, Hikikomori NEET, recovery, youth social work

*Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University